しぐれ

木島 桜谷

このしま・おうこく（一八七七―一九三八年）京都生まれ、今尾景年に学び、円山四条派の画家であったが、それを平易に親しみ深い画面に発展させた。初期文展に出品、何度も受賞して審査委員も務めたが、晩年は漢詩漢文に親しみ、隠とんした態で生涯を終わった。代表作に「しぐれ」「華月」「駅路の春」などがある。

名画歳時記

「しぐれ」は明治四十年第一回文展に二等賞該当なしの二等賞を受賞した作品である。桜谷満三十歳、ちょうど結婚した年でもあり、仕事の面でも私生活の面でも彼の人生で一番希望に満ち充実した年であった。彼の人生の最初の部分は、早く父親を失ったため、四人兄弟の二男ではあったが、経済的な責任の一部を背負わねばならず、かなり厳しい日日であったようだ。朧げな記憶の中に、少年時代一枚何銭かで扇子の絵を日に何枚も描いたという思い出話がよみがえる。

二十歳代後半から名が出はじめた彼は、この「しぐれ」で受賞後もつぎつぎに賞を得、大正中期までの十数年間、華やかな道を歩いた。しかし、その後は次第にいわゆる画壇から遠ざかり、気分の赴くままに絵筆を執り、詩書に親しんだ。何故彼がそのように画壇に背を向けるようになったのか。

「師今尾景年から受けた教育と彼自身の思想とが時代に合わないものになっていた事によるのではないだろうか」

とある美術書には書かれている。すでにそういう時期に入っていた彼しか記憶にない私には、むずかしい事情がわかるはずもないが、子供の目から見た彼は静かな優しい好々爺でしかなかった。

彼は雷がとても嫌いだった。雷が鳴り出すと、すぐ裾が水色のぼかしになった白い蚊帳をつり、子供たちを連れてその中に入って、雷がずっと遠ざかるまでじっと息をひそめていた。

画室に「おへその火鉢」と皆が呼んでいた木製の火鉢があった。欅の丸太をくり抜いて作った直径四十センチ位のおへその形をした火鉢で、両脇にたんすの銀のような金具がついていて持ち運びに便利にできていた。その灰の上には何時もどびんをのせていたが、中のお茶はすっかり煮つまって苦くなっていた。

お酒をほとんどたしなまなかった彼は、そんなお茶を好んで喫み、虎屋のねり羊羹が好物で何時も傍に置いていた。私たちは時々この苦茶を飲ませて貰いに行ってはお話をねだった。それは大抵狸の話だった。

家は千坪余りあり、広い庭があったが、植木屋を入れて庭園らしく造る事を好まず、樹々は思う存分枝を伸ばした自然のままの姿をしていた。彼が好んで描いた動物画の動物たちに寄せる温かい心や、ありのままの自然を愛する心、子供たちに対する限りない慈みの心、そのようなあまりにも純粋な心が、汚れの多い世間に背を向けさせる結果になったのかもしれない。

（かとた・ももこ＝京大教授、門田元氏夫人、故桜谷孫）

自然愛する心そのままに

門田 もも子